

# 「阿蘇わくわく自然体験塾」

【主催】 国立阿蘇青少年交流の家

【後援】 熊本県教育委員会 阿蘇市教育委員会

【実施期間・参加者】

〈阿蘇大自然ふれあい交流編〉

●熊本県立大津支援学校

平成24年7月3日(火) 生徒17名, 引率者9名, ボランティア4名

●熊本県立小国支援学校

平成24年9月26日(水) 生徒22名, 引率者12名, ボランティア4名

※当初, 7月13日(金)実施予定だったが, 荒天のため延期。

〈親子ふれあい交流編〉

●熊本県立大津支援学校

平成24年8月26日(日) 生徒17名, 引率者9名, 保護者12名, ボランティア12名

●熊本県立小国支援学校

平成24年7月29日(日) 生徒19名, 引率者11名, 保護者9名, ボランティア8名

〈学校ふれあい交流編〉

●熊本県立大津支援学校・熊本県立小国支援学校

平成24年9月25日(火)～26日(水) 生徒17名, 引率者9名, ボランティア12名

【実施場所】 国立阿蘇青少年交流の家とその周辺

【検討委員会委員】

|                      |       |           |
|----------------------|-------|-----------|
| 熊本学園大学社会福祉学部社会福祉学科   | 准教授   | 相 藤 絹 代 氏 |
| 九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科 | 准教授   | 佐々木 順 二 氏 |
| 熊本県教育庁教育指導部特別支援教育課   | 指導主事  | 宮 本 信 高 氏 |
| 熊本県立大津支援学校           | 校長    | 市 原 久美子 氏 |
| 熊本県立大津支援学校           | 高等部主事 | 岩 切 昭 仁 氏 |
| 熊本県立小国支援学校           | 校長    | 甲 斐 憲 彦 氏 |
| 熊本県立小国支援学校           | 高等部主事 | 山 内 雄一朗 氏 |

## 1 趣 旨

「特別な支援を要する児童・生徒を対象に, 阿蘇の大自然の中で自然体験や社会体験, 交流体験をと  
おして, 豊かな心を育成する場を提供する。」という特別支援学校と青少年教育施設の連携事業プロ  
グラムの開発を行う。

## 2 目 標

- (1) 多くの仲間やボランティアとの幅広い交流活動や発表活動等をとおして, コミュニケーション能力  
を育成する。
- (2) 様々な自然体験活動をとおして, 自然と親しもうとする心を育成する。
- (3) グループ活動や集団での宿泊体験をとおして, 仲間と協力して楽しく活動しようとする心を育成す  
る。

### 3 事業展開

#### (1) 研修プログラム

|                  |        |      |      |           |         |         |           |          |         |       |                           |          |       |          |       |       |       |         |    |
|------------------|--------|------|------|-----------|---------|---------|-----------|----------|---------|-------|---------------------------|----------|-------|----------|-------|-------|-------|---------|----|
| ふれあい交流編<br>阿蘇大自然 | 7:00   | 8:00 | 9:00 | 10:00     | 11:00   | 12:00   | 13:00     | 14:00    | 15:00   | 16:00 | 17:00                     | 18:00    | 19:00 | 20:00    | 21:00 | 22:00 | 23:00 |         |    |
|                  |        |      |      | 学校出発      | 移動      | 交流の家に到着 | 出会いの集い    | 施設探検     | ウォークラリー | 昼食    | 別れの集い                     | 交流の家出発   | 移動    | 学校到着     |       |       |       |         |    |
| 親子ふれあい交流編        | 7:00   | 8:00 | 9:00 | 10:00     | 11:00   | 12:00   | 13:00     | 14:00    | 15:00   | 16:00 | 17:00                     | 18:00    | 19:00 | 20:00    | 21:00 | 22:00 | 23:00 |         |    |
|                  |        |      |      | 学校出発      | 移動      | 交流の家に到着 | 出会いの集い    | ピザ作り体験   | 昼食      | 片付け   | 阿蘇水基巡り                    | フィールドビンゴ | 別れの集い | 交流の家出発   | 移動    | 学校到着  |       |         |    |
| 学校ふれあい交流編        | 7:00   | 8:00 | 9:00 | 10:00     | 11:00   | 12:00   | 13:00     | 14:00    | 15:00   | 16:00 | 17:00                     | 18:00    | 19:00 | 20:00    | 21:00 | 22:00 | 23:00 |         |    |
|                  |        |      |      | 学校出発      | 移動      | 交流の家に到着 | オリエンテーション | レクリエーション | 出会いの集い  | 昼食    | ・自然物採集<br>・色集めゲーム<br>自然散策 | ものづくり体験  | 休憩    | 交流スポーツ大会 | 準備・移動 | 夕食    | 入浴    | 学校紹介タイム | 就寝 |
|                  | 7:00   | 8:00 | 9:00 | 10:00     | 11:00   | 12:00   | 13:00     | 14:00    | 15:00   | 16:00 |                           |          |       |          |       |       |       |         |    |
|                  | 起床・洗面等 | 朝の集い | 朝食   | 宿舎清掃・退所点検 | お別れセミナー | 自然散策    | 交流の家出発    | 移動       | 学校到着    |       |                           |          |       |          |       |       |       |         |    |

#### (2) 目標達成のための手立て

##### ① 検討委員会の設置

本事業を円滑に運営し、事業の充実を図るため、特別支援教育の専門家や連携学校の先生方を招聘し、検討委員会を組織した。

| 回 | 開催期日   | 主な内容                             |
|---|--------|----------------------------------|
| 1 | 6月25日  | 「阿蘇わくわく自然体験塾」交流プログラム開発・評価方法等について |
| 2 | 12月12日 | 事業報告・アンケート結果等による事業の成果と課題・次年度にむけて |

##### ② コミュニケーション能力を育成するために

幅広い人間関係づくりができる場を多く確保するため、2校での交流事業を実施した。両校混合チームでのスポーツ交流大会やものづくり、食事タイムなど、様々な交流プログラムを行った。また、スライドを利用しながらの学校紹介や修学旅行の思い出等の発表会、活動後の感想の発表など、生徒一人一人が自分の気持ちをそれぞれの方法で表現する場を設けた。

##### ③ 自然と親しもうとする心を育成するために

自然散策をしながら集めた自然物を使つてのものづくりを行った。ものづくり体験では、自分の技能や興味に応じて選択コース（ネームプレート・紙皿リース・ドリームキャッチャー）で実施した。素敵な記念品ができ、生徒たちも作り上げた達成感を感じることができたようである。また、ピザ窯を使って、野外での親子ピザ作り体験を行った。事業後の保護者アンケートに、「自宅でも子どもとピザを作りました。」という言葉があり、親子ふれあいのきっかけづくりになったようである。また、阿蘇の湧き水を巡る「阿蘇水基フィールドビンゴ」では、仲間やボランティアと協力しな

がポイントを見つけ、そして阿蘇の湧水をグイッと飲みながら、からだ全体で自然の恵みを感じ取ることができたようである。

④ 仲間と協力して楽しく活動する心を育成するために

小国支援学校は、全国大会に出場するほどフロアホッケーに積極的に取り組んでおり、両校の交流のきっかけづくりなると考え、プログラムに取り入れた。混合チーム対抗戦の試合や簡単なゲームなど、個に応じた内容で実施した。小国支援学校の生徒が、大津支援学校の生徒に、丁寧にルールを説明したり、優しくパスを出したりする姿が多く見られ、また、初めて経験する大津支援学校の生徒はシュートを何度も決めたり、声を出したりパスを受けたり、とても意欲的にプレーしていた。

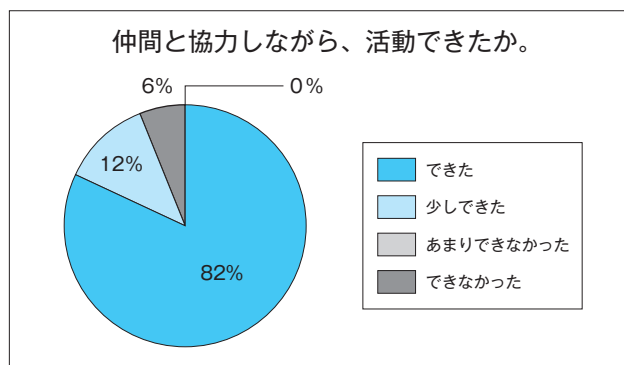
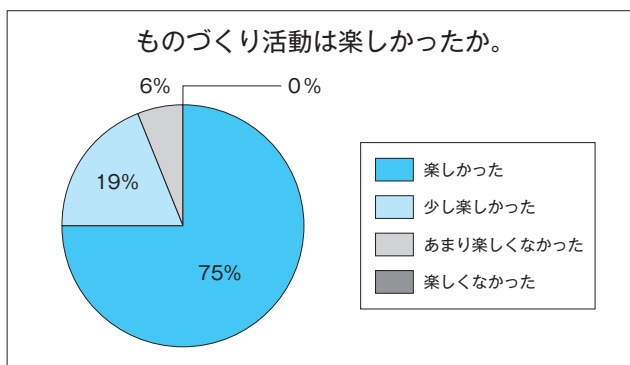
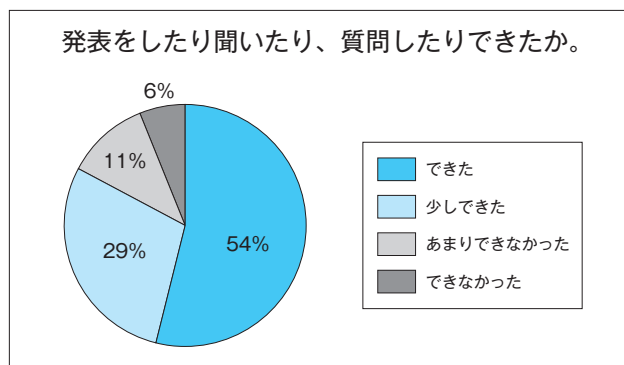
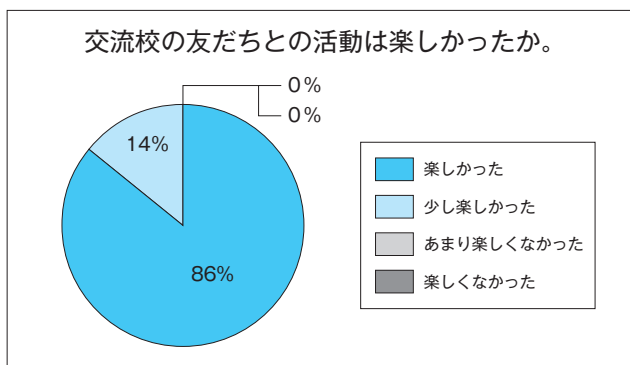


また、協力しながら活動できるようにグループでの活動を行ったり、交流の家での食事や入浴等、1泊2日の生活体験を実施したりした。

## 4 結果

アンケートの結果は次のとおりである。

〈生徒へのアンケート〉



### 【生徒の声】～抜粋～

- 小国支援学校の人にフロアホッケーの説明をしてもらい、ルールも分かりよかった。
- ボランティアや大津支援学校の人たちとふれあえて、とても楽しく、思い出に残りました。また、ふれあいをしたいです。
- 大津支援学校の交流はとてもいい機会だった。なかなか支援学校どうしの交流はあまりなかったので、絶好のいい2日間だった。初めて会ったのに、2日間で親しくなりました。
- 小国支援学校の人と初めて出会って、最初は緊張したけど、友だちになった〇〇ちゃんと仲良く楽しくできて幸せでした。また会いたいです。

### 【保護者の声】～抜粋～

- ピザ作りが印象に残ったようで、早速、自宅でピザと一緒に作りました。本人も満足気だった。
- 学生ボランティア（お兄さんお姉さんたち）と接することが少ないので、とてもいい経験となった。そしてボランティアの方々も子どもたちと直接接することで、障がいのことを理解できたと思います。お互いにプラスになったと思う。
- 子どもが適度な疲れで、飽きないよう活動内容と時間配分が工夫されていた。
- フィールドビンゴでスコアカードに、水の名前が書いてあると良かったと思った。



### 【引率教員の声】～抜粋～

- 保護者、教員、ボランティア、交流の家の職員、小国支援学校と様々な人との交流があり、コミュニケーションの幅が広がったと思う。
- 日頃、生徒数の少ない中で限られた人間関係しか経験できない生徒たちが、同世代の友だちと交流することで、普段見られないようないきいきとした表情をしていたように思う。また、交流の家のプログラムに参加することで、時間やルール、マナーを守ることの大切さも、いつもと違った緊張感で感じることもできたのではないかなと思う。
- 学校では、なかなか体験できない活動だったので、生徒たちはとても楽しんでいたようだった。
- 他校との交流によって、友だちができたり仲良くなったりしたことで、表情が明るかった。
- 「友だち」という言葉を多く言うようになった。
- 他校との交流の機会が普段ないので、とても有意義だった。「それぞれの学校でこんなことをやっているんだ」ということを生徒も知ることができたり、発表の様子やお手伝いなどを見ながら、「自分もやろう!」という意欲が高まったたりできたと思う。
- 私たち（教員）にとっても、支援学校同士の交流は初めてだったので、とてもいい経験になった。
- 特別支援学校の生徒たちは、なかなか他校（特支の）との交流が少ないので、とても有意義な事業であった。私自身も、このような機会を経験したことがなかったので、特別支援学校にいる同世代の生徒たちが交流することで、普段とは違う表情を見せたり、社会性を発揮したりしていたことが、とても新鮮でうれしかった。それは、やはり同じ気持ちや目線をもった友だち同士であったことが大きかったのではないかなと感じた。

### 【ボランティアの声】～抜粋～

- 先生方の生徒へのかかわり方を見て学ぶことが多かった。優しく接するところと厳しく指導するところなどメリハリがあり、とても勉強になった。
- こちらも話しかけることもあったが、生徒が積極的に話しかけてくれることが多く、とても感心させられた。
- 自然散策後、フロアホッケー後に体調を悪くする生徒がいた。個に応じた活動内容等、もっと留意する必要性を感じた。
- 2校の交流事業で、初めは照れているようだったが、すぐに打ちとけてる様子が見られて、とても微笑ましかった。
- 車椅子を利用した生徒と接するなかで、後ろにだけでなく、顔を見ながら、同じ目線の位置で離すことの大切さを感じた。



## 5 成果と課題

### (1) 成 果

#### ① 交流プログラムの開発

本事業のプログラム開発にあたっては、検討委員の先生方のご指導ご助言をいただきながら、大津支援学校と小国支援学校のご協力を得て実施、検証を行ってきた。更に、両校の先生方には、生徒一人一人の個に応じた活動の内容やスムーズな流れ等、アドバイスいただいた。そのため、個々の安全面に配慮したプログラムになった。

#### ② コミュニケーション能力の向上

他校の生徒や先生、ボランティアや交流の家職員といった多くの人とのかかわり、広い人間関係づくりができた。また、その人間関係を広げるための方法、表現の仕方を「知る場」、また「身につける場」の一つとなったと考える。更に、1泊2日の宿泊体験で人間関係の深まりも出てきた。

#### ③ サポート体制の確立

検討委員の先生方のご意見をいただきながらプログラムを開発したり、またボランティアの確保や質の向上に向けて、特に、相藤先生と佐々木先生には多大なるご支援をいただいた。今後も、更なる連携を深めながら、特別支援学校との連携事業の充実に努めていきたい。

### (2) 課 題（次年度の方向性）

本事業は、今年度が3年目となり、節目の年であった。今回取り組んだ交流事業は、検討委員の先生方、両校の先生方から、高い評価をいただいた。そこで、交流体験を中心としたプログラムを、他の特別支援学校にも広報・提供していきたいと考える。そして更に、現存のサポート体制を維持・継続し、連携を取り合いながら、交流プログラムの内容充実と更なる開発に努めていきたい。

企画指導専門職 小菌 正臣